

親子関係を克服し、培われた経営基盤から 新たな事業を立ち上げる

株式会社A-Line
〈リュウ鍼灸整骨院〉

サービス業

企業情報

- 代表取締役：妹尾 晃典
- 本社住所：大阪府大阪市鳥取中126-1
- 創業年：2012(平成24)年
- 資本金：100万円
- 従業員数：12名
- 業種：サービス業、鍼灸整骨・介護



事業発祥の地、内装

子どもへの情熱が 事業拡大に結びついた

2001(平成13)年、創業者である父・妹尾隆正氏は、民間プールへ水泳コーチを派遣する事業を行う傍ら、野球選手をめざす二人の息子のために、室内練習場を整備した。さらに、トレーナーによる疲労回復や筋肉のケアのため専用ルームを練習場横に作るなど、熱心に取り組み、選手に育て上げた。この取り組



施術の様子

みが拡大し、鍼灸師や柔道整復師を雇い入れ、室内練習場を拠点とした、鍼灸・整骨院を開業するなど、事業化した。さらに、そこで得た経営ノウハウを活用し、多店舗展開、フランチャイズの仕組みを手掛けていくようになった。

父の事業は拡大し、2010(平成22)年頃には大阪泉州地域をはじめ、和歌山、静岡など10店舗以上の鍼灸整骨院を経営する事業に成長させた。しかしながら、父は、事業の拡大志向が強いが、その反面、体制作りが追いつかず、人材の流出が続くなど、事業全体に黄色信号が灯る時期があった。

そうした中、父をはじめ関係者からは、社会人となった二人の息子に事業承継を期待する声があがってきた。しかし、長男は既に、九州で鍼灸整骨院を開業していたため、次男である現経営者の妹尾晃典氏を軸に事業承継の準備に着手することとなった。

父の事業は拡大し、2010(平成22)年頃には大阪泉州地域をはじめ、和歌山、静岡など10店舗以上の鍼灸整骨院を経営する事業に成長させた。しかしながら、父は、事業の拡大志向が強いが、その反面、体制作りが追いつかず、人材の流出が続くなど、事業全体に黄色信号が灯る時期があった。

そうした中、父をはじめ関係者からは、社会人となった二人の息子に事業承継を期待する声があがってきた。しかし、長男は既に、九州で鍼灸整骨院を開業していたため、次男である現経営者の妹尾晃典氏を軸に事業承継の準備に着手することとなった。

経営基盤を引継ぎ、 さらなる目標へと歩みだした

晃典氏は、父が経営してきた形態のまま承継するのは、自ら思い描く事業の将来像に合わないと考え、新たに法人を設立して、経営基盤を引継ぐことを提案した。当初、父は、自身が経営から退くことに対して難色を示していた。そこには、創業者としての顔と父親としての顔があり、親子関係が複雑になる時期もあったが、度重なる話し合いを繰り返し、2012(平成24)年に新法人を設立して、資産と顧客を受け継ぐ形態で事業承継を行うことで一致した。

晃典氏は、「最初は一から経営基盤を作り上げ

ようと四苦八苦していたが、父が作った顧客との密度の濃い信頼関係から構築された経営基盤を承継することで、自ら思い描く事業計画の推進が容易になった」と感謝しながら振り返る。

承継後、利用者としてしっかり向き合うことを心掛け、評判を高めることができ、事業は順調に軌道に乗った。2016(平成28)年には、介護を新たな事業の柱にすべく、介護福祉士や看護師などの専門スタッフを新たに雇い入れ、創業地の近隣にデイサービスセンターを開所した。こうした「地域密着を進め、充実した生活支援サービスの提供」を目指すといった経営理念を事業計画書にまとめあげ、社員一同で共有、目標に向かって邁進している。



今後は、宿泊型介護事業、クリニック開設への展開を視野に入れ地域密着型を極めたビジネスに注力していく予定である。今後は自らの代で介護事業を充実させるなどに意欲を燃やし、52歳で引退、息子などにバトンタッチしたいと計画的に進めている。



事例の着眼点

- 親子の間で事業承継をする際には、意見の対立が生じるケースが多い。本事例においても、一定期間そうした時期もあったようだが、事業承継を起点として、親子関係は修復し、次のステージに進んでいること
- 法人設立のための資産や顧客を引き継ぐ事業承継ができたこと
- 経営理念をまとめた事業計画を社員と共有していること



事例企業が 活用できる施策

- 商工会・商工会議所等の経営指導員や事業承継相談デスクへの相談
- 大阪府事業承継ネットワークの承継コーディネーターやブロックコーディネーターへの相談や専門家派遣事業の活用